

「日本沖合での台風」(1893)

早朝当直(午前四時から八時)真つ最中の午前六時を知らせる鐘が鳴つたときのことであつた。朝食を終えたばかりであつたが、甲板^{かんばん}上の見張りはその場で、また、その他の乗組員全員はボート(小型帆掛け舟)のそばで待機するように命令が下つた。

「面舵^{おもかじ}！ 面舵いっばい！」と船首を右に回すように、船長が大声で指示を出した。「上部帆^{トッパスル}を上げろ！ フライングジブ先端三角帆^{フライングジブ}を下げて！ 前方三角帆^{ジブ}を風上^{かざかみ}にもどして、先端下帆^{フオースル}をおろすんだ！」『ソフィア・サザランド』号は一八九三年四月十日襟裳岬^{えりも}の近くを航海しており、日本沖合に向かつていた。

その後、船内は騒然としていた。何しろ六隻のボートに十八人の船員たちが押し寄せたからだ。船員のなかにはボートを降ろそうとしている者もいれば、綱を解いている者もいた。また、舵取りたちは羅針盤や救命用小型水樽、そしてこぎ手たちは弁当箱を持って甲板に現われた。捕獲担当船員たちは、二、三丁の散弾銃と、小銃を入れた重たい弾薬箱とを脇に抱えて甲板をよろよろと歩いてしたが、まもなくそれらはすべて、油布と手袋もろともボートに詰め込まれた。最終命令を船長が出し、各ボートに三人ずつ乗り込み、三組のオールでこいで出航した。風上に向かうわれわれのボートは、オールをこぐのに余分な時間が必要だつた。風下^{かざしも}に向かうボートもまもなく一隻、一隻、

三隻と帆を揚げて出航し、追い風によって南西の方向に進んでいった。一方スクーナー型帆船はんせん(通例二本以上の帆柱を持つ縦帆式帆船)は、不測の事態になってもボートが順風にのって母船にもどってこられるように、風下に舵をとった。

その日は、すばらしく好天に恵まれた朝であった。われわれが乗ったボートの舵取りは、不吉にも首を横に振り、太陽が昇ってくるのを見つめて、今後の見通しについて、「太陽が朝、まっ赤になつているときは、要注意だ」とつぶやいた。太陽は怒つたようにじろつと見下ろしており、白くふわふわした雲の中にある黒い部分が赤面しておびえているように思えたが、まもなくその姿を消した。

2
北方にある襟裳岬の頂は、黒く不気味にそびえており、それはまるで巨大な怪物が深海から顔をのぞかせているようだった。冬の雪は日光によつて完全になくなつてはいなかったが、ぴかぴか光る白い斑点状になつて岬を覆い、その上をそよ風が海のほうに吹いている。大きな海カモメは、微風のなか、羽をばたばたさせながら半マイル(約八百メートル)以上海面を水かきのある足でかいて、ゆつくりと飛び上がる。その音が聞こえなくなつたかと思つと、キョウジヨシギという鳥の大群が、ヒューツという羽の音とともに風に向かって飛び立つ。そこにはおびただしい数の鯨の群れが戯れており、蒸気機関車の排気音のような音をたてている。ツノメドリが、耳ざわりで不快な音をたてて

おり、われわれの前方に小集団で群がっている六頭のアザラシに、警戒態勢を取らせてしまった。そのため海中にいたアザラシは、海面に飛び上がり逃げていつてしまった。海カモメが、悠々と長い距離を堂々たる態度で曲線を描きながら、われわれのまわりを飛んでいた。故郷を思いださせるようなイエズズメが、

船首楼せんしゅう(船の前方で高くなっている部分)の上にずうずうしく止まっており、首を横に向けてのんびりとさえずっている。われわれの乗ったボートは、まもなくアザラシの一群のあいだに入った。バーン、バーンという銃声が風下のほうで聞こえていた。

風が徐々に激しさを増してきている。午後三時までにはわれわれが乗ったボートに十二頭のアザラシが捕

獲されており、このまま狩りを続けるべきか撤退すべきか思案していると、「撤退」を示す旗がスクーナー型帆船ミズンマストの後方帆柱に掲げられた。風が勢いを増し、気圧も下がっているので、ボートの耐用年数に悪影響を及ぼすのを船長が心配し始めていることは明らかだった。

われわれは風のあたる面積を少なくするために縮帆リーフを一本だけ揚げ、追い風に乗って引き返しはじめた。

舵取り係りの船員は、ぐつと歯を食いしばりながら両手でしっかりとオールを握りしめ、落ち着きのない目で前方にあるスクーナー型帆船をにらんで警戒態勢を取った。われわれは海面上で舞い上がり、ボートの主帆しゅほ脚綱あしづなの部分や船尾も浮かび上がってしまった。海水には強風で黒い細波さざなみが立ち、突風や大きな白波のために

われわれのボートがいまにも転覆してしまうのではないかと、舵取り係りの船員が恐れた。波は、まるで上機嫌でお祭り騒ぎをしているみたいだ。その動作はこの上なく奇妙で、上下左右あらゆる方向に荒れ狂っている。そしてついに、乳液状の白く泡立つ波頭をもつ不安定な緑色の大海が、ドーンドーンという音を立て海面から浮き上がり、他の波を見えなくしてしまった。だが、一瞬ではあるが波が違った状態になり、再び元の姿を現わす。日のあたるところでは、波は取り留めもなく色彩を変える。大きめの細波も小さめの細波も、そして小さな唾液状の泡やしぶきも、銀が溶けだしたような色をしている。海面から濃緑色が消え、まぶしそうな銀白色の海になるわけだ。だがそれも、そのう

ちに消え去り、手に負えない無用の長物の重々しい乱気流になる。このように不気味で不吉な予感がする海水は、浮き上がったたり、砕けて泡となったり、また波がうねったりを繰り返す。海水が打ちつける音や泡、そして銀色になるのは、太陽が昇るとともになくなってしまう。しかしその太陽も、西や北西の方から突然音を立てて流れてくる黒い雲に隠れてしまい、あたり一面暗闇に包まれる。これが、嵐の到来の前触れだったのだ。

われわれの乗ったボートは、まもなくスクーター型帆船に到着したが、戻ってきたのはわれわれが最後であった。すぐにアザラシの皮をはぐ作業が行なわれ、それに続いてボートと甲板の水洗いがあった。そして

やつとのこと、下にある船員部屋の火がバチバチと燃え盛る暖炉のそばで休息をとることができた。洗濯や衣服の着替えが済むと、栄養豊かなボリウム満点の温かい夕食が待っていた。それまでわれわれはスクーナー型帆船で、夜明け前に南の方角に七十五マイル（約百二十キロメートル）も航海を続けていたのだった。これもアザラシの大群に出会うためだったが、この二日間の狩りでは不連続きであった。

その後、午後八時から真夜中までわれわれは初夜当直にあたった。まもなく突風が吹きだしたので、船長は船尾楼（船の後方で高くなっている部分）を上がったり下がったりしていて、睡眠はあまりとれない様子であった。上部帆はすぐに揚げられてしっかりと固定され、

次に先端三角帆フライングジブが降ろされ帆柱に巻きつけられた。この頃までには大波がうねり始め、ときには甲板上にあたって泡となり、海水が流れ込み、ボートを粉々に砕くおそれがあった。午後十一時にはわれわれは、ボートをひっくり返して、嵐に対抗するために綱で固定するよう命じられた。この作業を初夜当直の終了を伝える鐘が鳴る午前〇時まで一生懸命に行なった。その時間になってわれわれは、深夜当直（午前〇時から4時までの当直）と交代し、ようやく解放された。私は下の船員部屋に行くのが最後になってしまった。そのときには、甲板上の次の当直スパンカーは、甲板上の次の当直が後尾縦帆を巻き上げていた。下の船員部屋では、新米の船員以外は全員眠りについていた。その船員は、以前煉瓦職人レンガだった男で、肺病

になり死にかけていた。海上灯がやみくもに揺れる動
きは、船首楼の端から端までちかちかとほんやり点滅
する光を放ち、黄色い防水布上の水滴が金色に輝く液
体状の蜂蜜のように見えた。船首楼の隅には、暗い影
が現われたり消えたりしているようだ。視線を甲板に
移すと、わずかな雲状の暗い部分の向こうには、エレ
ボス（死者が通る暗黒界）のように真つ暗なところがあ
り、それはまるで洞窟に竜が潜んでいるみたいだった。
スクーター型帆船がいつもより激しく横揺れすると、
時折海上灯が放つ光は一瞬甲板を貫通しているように
も錯覚する。ところが横揺れがおさまると、甲板上は
以前にも増して徐々に暗くなる。風の荒れ狂う音が索
具（帆・帆柱・ロープ類一式）の中を通り抜けると、音

が弱まったように感じられる。それはまるで、列車
が陸橋の上をガラガラという音を立てて遠くの方に行
ってしまったり、海岸に寄せては碎ける波の音が弱ま
るのと同様である。だが風上の船首にぶつかる海水の
大きな音は、船腹と甲板上をほとんど交互に耳をつん
ざいているようで、船首楼を歩いてみるとずっと鳴り
響いている。強風のためにスクーター型帆船が受ける
過度の圧力により、肋材ろくさい（船体の外形を形づくる構造材）
や帆柱、隔壁かくへき（船内を仕切る壁）のキーキーとうなる音
は、船員部屋の寝台で不安そうに寝返りを打つときに
発する、死に直面している男のうめき声をかき消す役
割を果たしている。また前方帆柱が甲板ビームフオーマスト（甲板
を支える縦・横に渡された補強材）にあたって、多くのは

がれやすい塗料が甲板上に落ち、嵐の音と重なります。まず騒々しくなっている。海水が小さな滝のようになり、船首楼の上部にあるわずかな暗い雲状のところから勢いよく流れ込み、水分を含んだ防水布から出る水とぶつかる。さらにそれが、甲板上をものすごいスピードで流れていき、船倉せんそう（船の下部の荷物を納める所）の中へ入り込んだ。

深夜当直中の午前一時の鐘が鳴り終わると、「全員、甲板に出て、帆の数を減らせ！」という命令が、大きな声で船員部屋に伝えられた。

そうすると、眠そうな船員たちは寝台からあわてて飛び起き身じたくをし、油布製防水服に着替えて防水ブーツを履き、甲板上に出た。当直命令が寒々とした

風や波の荒れ狂うような深夜に出たものだから、ジャックはぶ然として、「農場を売り払って船員になろうなんて、考えなければよかった」とつぶやいた。

強風が吹き荒れているのを実感したのは、息苦しい船員部屋を出て甲板上に出たときであった。強風はまるで壁のように立ちほだかり、船員でこった返す甲板上を移動することや、荒れ狂う突風が体にぶつかってくるので息をすることさえ困難に感じた。スクーター型帆船は、前方三角帆ジブや先端下帆フオースル、主帆メインスルの下部まで波立っていた。われわれ当直員たちは、先端下帆フオースルを降ろして、しっかりと動かないように固定した。まわりがまっ暗なために、われわれの仕事は大きく遅れた。黒い嵐雲が強風に押し流されてはいるが、星や月の光

は依然として地上にとどいていない。が、自然の力はある程度、われわれに有利に働いた。やわらかな光が、海洋の生物から現われたのだ。無数の微生物の発する小さな光が、青白く輝き光の大洪水となって、広大な海はわれわれにこれでもかと感動を与える。波頭は曲線を描き砕かれる前に高くそびえ、一段と高くまばらになる。そしてついには、波頭はとどろくような音とともに防波堤に打ちつけるのである。多量の海水がやわらかく輝く光を伴って、船員たちをあらゆる方向に殴り倒し、甲板上の隅々に運んでしまい、すき間からわずかな光が照り輝き揺らめいている。次に来る荒波に倒された船員たちが洗い流されると、他の船員たちが押し流されてくる。時折、荒波が次から次へとも

すごいスピードでやって来て、甲板上に大きな音を立てて激しく打ちつけ、舷牆げんよう（船の甲板の囲い）のところまで水浸しにしてしまった。あふれた海水はまもなく、風下にある甲板排水孔を通じて流れ落ちた。

主帆しゅほをたたむのに、われわれはすでにたたみ込まれた貧弱な前方三角帆ジッの下のを、強風に後ろから押されるように、否が応でも急いでいかざるをえなかった。その仕事をやつと終わる頃までには、荒れ狂う海面が強風によってさらに押し上げられてしまっていたので、船首を風上に向けてスクーナー型帆船を留めることは無理であった。われわれは、甲板上のがらくたや飛び散っている水しぶきのあいだを強風によって体が舞うように運ばれたのだ。けた外れの荒波がスクー

ナー型帆船の後部を襲い、ほぼ横向きにしてしまったので、船体は大きく左右に揺れつづけた。夜が明けると、われわれは前方三角帆をたたんだ。これですべての帆をたたみこんだことになる。スクーナー型帆船は風に乗って走行していたので、船首の上に荒波はかぶらずにすんだが、船のまん中の甲板上では荒波がとめどなく猛威をふるっていた。嵐は湿気をあまり含んではいなかったが、それが強風と結びついて細かい霧のようになり、帆柱にある横木と同じぐらいの高さまで吹き荒れて、ナイフで顔面を切りつけるような鋭く恐ろしいものとなった。そのため、百ヤード（約九十メートル）を越えると視界はゼロであった。

強風が長いゆつくりとした雄大なうねりを伴って、

大量の流れるような泡を生みだしている。海は濃いねずみ色になっている。スクーナー型帆船の荒れ狂うこっけいな動きは、急にスピードを上げるにつれてたいへん不快なものになってきた。山登りをしているかのように帆船は、広大な海の頂上に達するところまでひよろひよろと立ち止まりかけ、急に左右に揺れる。それから、大きく口を開けている崖を前にしてびっくり仰天しているかのごとくにひと息つく。その後、まるで雪崩にでもあったかのように、後ろから荒波が猛烈な勢いでぶつかり、帆船は前方へと急降下した。船首は吊錨架ちようびょうか（船首部両わきに突き出した角材）の下部までミルクのような泡で覆い隠されている。そして、その泡は、甲板のあらゆる方向にホースパイプ（船首甲

板にあつて錨についたくさりが通る鉄パイプ）や手すりを
伝わって流れ込んできた。

合わせていた。嵐とともに、その男の魂も消え去つ
てしまったのである。

やがて風は徐々に弱まり始め、午前十時ごろまでに
われわれはスクーナー型帆船を移動させることを検討
していた。その頃、一隻の船や二隻のスクーナー型帆
船、そして一隻の先端部が極度に小さくなっている四
本マストのバーケンティン型帆船を見かけた。午前十
一時には、後尾縦帆スパンカーや前方三角帆ジブを張り、移動を開始
した。一時間後にはすべての帆を張り終え、再び船尾
寄りの波をかき分けて、アザラシ狩りの漁場を求めて
西方に舵をきった。

船員部屋の前の方では、海で葬儀を行なう前準備と
して、二人の船員が例の煉瓦職人レンガの死体の傷口を縫い

「お春」(1897)

「あの女性がいったいどなたか、皆さま方はご存知か？ ぼけつとしていちゃいけないよ。芸者のなかでも最高の、お春という方だよ。純粹で、優雅で、神秘的な美しさを持ち、うっとりするような最高の舞妓でもあるんだ。このお春という芸者は、ギリシア神話にある、人を夢心地にさせる果実のような存在で、富士山に匹敵する日本を代表するような美形でもあり、われらの誇りということよ。アメリカでつまらん晩年など過ごさないで、日本の豪華な祭りの行列に参加して、お春と知り合いになつたらどうだい。お春はでっかい山車だしの一番上に乗っかり、感嘆の叫びをあげている大

勢の人たちを前にして踊るんだ。おまえさんは幸せ者だよ。日本の芸者崇拜の聖地とも言ふべき茶屋にいるんだから。このような所にいられる運命を与えてくださった父なる神に感謝しなくちゃ！ 特に、ここに來ることにたいへんなご尽力をいただいた有名な右大臣殿には、感謝の気持ち忘れちゃだめだよ！ 素晴らしい踊り子で、神々ミコトしい美しさを備えたお春を見ると、元気が湧き出てくるような気がするんだ。芸者や舞妓の最高峰であるお春の踊りを満喫したらどうだい！」

お春の舞踊に拍手喝采があり、以上のような声が客の中から聞こえた。有名で栄誉ある右大臣が、日本の娯楽の一端を紹介しようと、大英帝国の貴族を伴奏と

歌謡と舞踊を伴った晩餐会に招待していたのだ。その席のために、最も名だたる芸者たちや歌い手、伴奏者たちが雇われていた。それらの者たちは、大英帝国の貴族に負けないぐらい、芸の技術や立ち振る舞いのあてやかさの点で超一流であった。おそらく十数名の芸者たちが右大臣をもてなしていたのだが、終わってみるとお春に対して一番拍手・喝采が多かった。

芸者や舞妓は、日本の女性のなかで最も聡明で、知的で、教養があり、美しいことを条件に選ばれ、幼少の頃から芸道の修業をする。その修業は、人をひきつける優雅な舞踊や人柄だけでなく、歌謡や伴奏、もてなしの心で客に仕えるといった多岐にわたる作法にまで及ぶ。もちろん、精神の鍛練も例外ではなく、心配

りや知性、会話の訓練もあり、これらの面でも最高の女性を目指す。要するに、芸者や舞妓が行なう稽古の究極の目的は、芸の魅力を高めることだ。稽古においては、西洋の女優とほぼ同じ立場である。多くの芸者や舞妓は、茶屋での宴会を飾るはかない麗人^{れいじん}だが、その仕草の所々にきらりと輝く一面が見出せるのである。

お春は舞踊が終わると、その美貌、明るい笑い声、魅力あふれる人柄で、右大臣にいつものように気転をきかせてお仕えし、皆の前に現われ興奮の渦に包まれた。お春は日本人にとつて理想の美形であるが、西洋人をも魅了するものをもっている。体形はすんなりしており、胴長であり、尻は小さく、しなやかな優雅さ

を醸し出しており、自然な身のこなしによつてさらに魅力が倍增している。上半身はまるで少女のようである。地味な折り目の着物に被われた官能的ななまめかしさは、完全には表面に現われない。未婚女性の控えめできしやかな体形であると言つても過言ではないだろう。長細く、美しく湾曲している首は、上品にぶら下がっている形のよい頭に似合いの台座にすぎない。髪の毛は長くてまっすぐの艶々つやつやした黒色で、色艶のよい前頭部の上のほうから後ろへ櫛くしでかき分けられている。上品な楕円形の頭部にみごとな髪の毛が乗っかっているのである。長細い目のかなり上のほうで、眉毛は弓なりに曲がつており、線がとても精妙に描かれているので、浮き上がっているように見える。鼻は高く

なく、口は濃い紅色のおちよぼ口である。顔の色は透き通つたような淡いクリーム色で、いつもの頬紅が純粹さを暗示しているが、頬の色を見ると、内面の变化によつていろいろな連想が微妙に浮かんでくる。ある時には激情の極致になっていたり、またある時には温和な表情になっていたりすることがかすかに分かることがある。このように顔の表情は一瞬たりとも同じであることはなく、そのときの気分や思考状態を映す鏡のように変化する。時には快活で機嫌のよい陽気さ、またある時には心の奥深いいかめしい心情が見られる。つまり、頬の色は女性としての本当の深層心理を表わしているわけである。「お春はまさに夢心地になる対象で、日本を代表する富士山のような存在でも

あり、われわれの誇りなんだ！」という、お春を絶賛した客の言葉が真実味をおびてくる。

太鼓の伴奏が終わると、三味線の音が聞こえてくる。深紅色や黄色の着物を着た芸者衆が、秋の風に揺れる可憐な楓を表現している舞踊を披露する。が、居合わせた者たちの目と心は、お春に向けられている。うつとりさせるような美しさと特異な知性により、皆はお春の虜になってしまふ。高貴な右大臣の老衰も、お春のたまらない魅力の前には消えうせる。まもなくお春は席を離れ、今晚最後の舞踊のために着替えているあいだ、お客たちは彼女の素晴らしさについてえんえんと話をする。

お雛子が聞こえてくると、昔の侍用に完全武装した

鎧兜を身に着けたお春の登場である。侍とは日本

の中世の武士のことで、その本分は「忠誠心」という一語に包括されている。その忠誠心はとても純粹で永遠に変わらないものであり、妻や子ども、一族などとのあらゆる人間の絆、ときには自分たちの信じている神さえも、必要とあれば自分の主君である大名のために犠牲にしなくてはならないのである。これから演じられるのは、お春の十八番の一つであり、赤穂浪士の首領である大石内蔵助の生きざまを描いた「忠臣蔵」で、亡君の仇討ちを主題にしている。考えに考えぬいた大石の復讐心は堅固なもので、妻を離縁したり、子どもとの縁を切ったりしている。

お春は、自分の先祖を十二分に意識して演じた。大

名のお気に入りの娘として侍の血を受け継いでおり、將軍政治の激動の苦しい体験を間接的に経験していた。また、数世紀にもわたる鎖国の絶頂期も間接的に経験しており、中世の日本の誇り高き崇高さを引き継いでいる。要するに、日本民族のすべての誇りを、遺伝子と伝統によって継承しているのである。父君の荒々しい血が燃え盛り、お春のすらりとした肉体は大石の焼くような激情に合わせて共振しており、観ている者にとって息が詰まるようであった。お春は昔の英雄を勇ましい足取りと身振りでみごとに演じきり、観客は畏敬の念から静まり返った。最高に優雅な舞踊を前にして、観客は盲目的に心から崇拜し固唾かたずを呑んで見守った。明るい照明が消され中世の日本の姿を真に迫

る演技で再現されると、茶屋の賑やかさや芸者たちの笑い声もなくなっていた。憂鬱ゆううつや悲しみ、苦悩のどん底から嵐のような激情と仇討ちに対する執念へと展開し、ついには、小刻みの荒々しい調子の伴奏とともに、大石は大名に仇討ちをする。これで大石の願望はほぼ達成されたわけであるが、最後に「腹切り」という劇的な結末が待ち構えている。人生の希望や喜びをいっさい捨て去り、大石は切腹をし、主君に続いてこの世から姿を消す。鋼鉄の刀がきらりと光り、それが腹に突き刺さり、お春は死んだふりをして舞踊は終わりとする。観客は拍手喝采一切なしで涙目になり、芸者たちはすすり泣いていた。お春は高まる感情に圧倒され、ぎらぎらした目で胸をふくらませ、右大臣に挨拶もせ

ずに、また観客にもいつものお別れの挨拶をしないで、動揺した様子で目に涙を一杯ためて舞台を降りた。

お春はようやく家にもどり、行灯あんどんの柔らかな光を浴びながら、夢想にふけていた。だが、それは茶屋での酒宴のことではなかった。見知らぬ国にいる勇敢な豊臣という男のことを思い浮かべていたのだ。冒険好きの豊臣は、お春の娘時代の恋人で、成人してからも思いは募るばかりであった。

お春と豊臣の出会いは一風変わった。二人とも侍の血が流れているが、豊臣の父君は繁栄していた。一方、お春の父君はもうすでに亡くなっていたので、孤児として茶屋の主人のもとで生活をするようになった。そこで娘時代を過ごし、洗練された芸者のあらゆ

る芸やたしなみの修業に明け暮れた。お春の結婚適齢期の頃に豊臣と出会い、その後芸者遊びのためにしばしば茶屋に足を運んでいた豊臣に、恋心が芽生えるようになった。

二人の恋愛も一風変わったものだった。当時の一般社会の伝統や慣習とは異なり、両親が子どもの結婚相手を選ぶわけではなかった。だから豊臣は悶々もんもんやるかたなく、お春との結婚に向けて内密に事を運んでいた。茶屋の主人は、慣例的にお春の結婚に反対した。というのは、お春は契約上主人のものになっており、茶屋の常連客に指名されて、みごとな舞踊を披露するのが本分であるからだ。ところが豊臣は、お春のことがどうしても頭から離れなくなり、ある日、自分の全ての

財産を売り、茶屋の主人に身代金を支払った。このようにしてお春は、茶屋の主人から解放され、自由に豊臣を愛し結婚することができるようになった。このことをお春は、一日たりとも忘れたことはなかった。

豊臣は野心家であり、一文無しになっても貧しいことは一向に気にしていなかった。二人は結婚の約束をし、お春は舞踊を続けることにした。一方、豊臣は海を渡り、白人の野蛮人が住む国に行つて財を成し、たくましい男になつてもどつてきたら、お春と夫婦めおとになると約束した。異国での暮らし向きは、たまに送られてくるごく短い文かみ以外には知る由よしもなく、豊臣の放浪の旅のことはほとんど分からないままであつた。十年の歳月が流れ、お春は豊臣の富に頼らなくてもいいよ

うに自分でお金を貯めながら、恋人を待つていた。お春は裕福になつていた。いや、たいへんな資産家になつていたと言つても過言ではなかった。そのわけは、もはやお春は誰かに雇われた人気芸者ではなく、人々の崇拜の対象でもなく、華族たちの自暴自棄の対象でもなくなつていたからである。自分の恋人のお陰で、自由で独立した身になつていたので、もう茶屋の主人に稼ぎを没収されることはないのである。でも豊臣の不在中、お春の身の回りにはいろいろなことがあり、人生はけつして平坦な道ではなかった。お春の旦那になりたいという誘いはたいへん多く、それは熱心なものであり、その大半は光榮ではあるが強引なものであつた。そのなかには、強引な手口で結婚を迫つてき

た金持ちの絹商人をはじめ、海軍の大佐、大名の息子、そして、帝国大学の威風堂々とした教授もいた。それらの者は皆、お春の魅力の虜になっていたのである。だがお春は、娘時代の恋人であり成人してからも憧れの人である豊臣のために純潔を守っていた。お春は、現世の苦悩を忘れるために、いつも純潔を大切にしていたのだ。こういう中お春に、豊臣帰国の吉報が舞いこんだ。翌日、蒸気船が横浜に到着するので、お春は汽車に乗ってはるばる出迎えに行くことになった。

お春は喜びのあまり、かわいらしい涙で目を曇らせ頬を濡らしながら、近くに置いてあったクスノキ材でできている収納箱の蓋を開け、綿製の多くのひだがついている包みを取り出した。その包みを解くと、中に

は美しい絹でできた腰に巻く帯おびがあった。これは女性の婚約の象徴であり、豊臣がお春と婚約しているということを意味していた。再び収納箱を開け、今度は、侍の父君の形見である二本の刀を取り出した。日本民族としての深遠な誇りと威厳のある愛国心を胸に秘め、お春はじつと真剣にその二本の刀を見つめた。そうすることによつて、豊臣への想いから時々忘れかけていた父君がとても身近に感じられた。お春の父君は嚴格で老練な武士であるとともに、騎士道精神を持った剣道の師範でもあった。長いほうの刀で大名の家系を長いあいだ守りぬき、万事休すの状態になればもう一方の短いほうの刀で腹切りによる名誉ある死を選び、皆の大赦を相手に懇願した。蓮の花が咲く暑い日の夜、

お春は父君の最も貴重な遺品であるこれら二本の刀を前にして眠った。朝になると、髪結いは、お春がにっこりとした顔つきですやすやと眠っている姿を見かけた。

ああ、豊臣とはなんて乱暴で残酷な男なんだろう！日本に帰り夫婦になって一年が経過してしまった！この間の結婚生活は、苦痛の連続であった！お春は純潔を守りながら、豊臣の帰国を首を長くして待っていたのに、まさに天国から地獄に落とされたようであった！

お春が横浜港の棧橋で出迎えたとき、豊臣は西洋の服を身にまとっており、何と威厳があり高貴に見えたことか。そのときは、たわいもない夢がやっとかない、

豊臣は最高に立派な男になったと、お春は心の底から思った。だが、ああなんとという心の変わりようか。でもそのときは、豊臣が放浪していた外国の悪魔のことを分かつてはいなかった。豊臣はこれらの悪魔がもたらした多くの慣習を身につけて帰国したのだった。

豊臣の浪費癖！これには心底仰天した。浪費癖といっても、尋常でないのだ。お春は以前から、外国では簡単にお金を稼ぐことができることを承知してはいたが、お金を使うことがそんなに容易であるとは、そのときまで知らなかった。だが悲しいかな、豊臣はそうした浪費癖を身につけていたのだ。お春は東洋人特有的の儉約の美德をもつ締めり屋だったので、そのような浪費はたいへん不愉快で、押しつぶされそうな気が

した。豊臣を信頼して、お春は妻としての服従心から全財産を譲り渡してしまっていた。そのお金は汗水たらして働いたあげくに手に入れたもので、それを湯水のように使われてしまったのだ！ ああ、何ということか！ 結婚後一年すると、お春の財産は一銭も残っていないかった。

豊臣は「白い悪魔」の国で多くの習慣を身につけていたが、何とそこでプロレスラーになっていたのだ。誇り高く多額のお金を稼ぐことがたびたびあるとはいっても、レスラーとは何という変わりようか。知りあいはごろつきや女郎であった。また、下品な茶屋にもしばしば通い、日本の酒を捨て、高級な外国のアルコール飲料をおぼえてしまった。豊臣は一銭も家に入れ

てくれないので、お春はお金を稼ぐためにまた踊りに出なくてはならなかった。

何という男なんだろうか！ 豊臣はお春の献身的な愛をすべて忘れてしまったばかりか、もつと恐ろしいことが待ち構えていた。豊臣は外国の美意識を身につけて帰国しており、お春はもはや美人の範疇には入っていないかったのだ。芸者のなかで最も美しいだけでなく、日本の女性のなかでも最高の美形で、日本人女性の美の象徴だったかつての恋人が、豊臣にとつてもはや美人ではなくなったわけだ。豊臣は酔っぱらって家に帰ってくるの不機嫌になり、お春の歩き方から身のこなし、小さい尻、小さい胸、長細い顔、目尻が上がつていることを非難し、西洋の美しい女性のこととな

ると、夢中になって喜びの声を上げるのである。そし

て、仏像のような大柄の西洋の女性を豊臣はこよなく

愛した。とんでもないことだ。男のように大またで歩

き、大きな尻と実際に変形したようなたんこぶを顔に

つけた獐猛どうもうで精悍せいかんな創造物に感嘆の声をあげていた。

大きな口や高い鼻、そして、獐猛な濃いまゆ毛の真下

にある窪んだ目は嫌悪を感じる。このような創造物は

とても恐ろしい格好をしているので、日本の赤子は睨にら

まれるとびっくりしてわっと泣き出すだろう。このよ

うな獣はともいまわしく、自分や西洋人について、

うんざりするような調子で、気取って話をする。豊臣

はこのような西洋の女性をえらく気に入っており、お

春にも同様のことを論ずるのである。ああ、とんでもな

いことだ！

なお悪いことに、豊臣はお春をときなくに殴ることがあ

った。そのうえ、吉原の混血女郎のことがとても気に

入っていた。日本人の母とイギリス人の父を持つ娘の

ことを豊臣はとても魅力的だと思っていた。それは、

「白い悪魔」の美人と似ているところがあつたからだ
ろう。

お春が一番嫌だと思つたのは、「お春よ、今晚、踊り

に行つてお金を稼いで来い。そうしないと、おまえを

殴るぞ。三行半みくだりを書くぞ」と脅かされることであつた。

以前は、そのようなことを一度も言われたことはなかつたのだ。

つたのだ。

「お地蔵様、お助けを！」と、お春はうめき声を発

した。「とんでもないことだ！ とんでもないことだ！」

心に鉛があるようなお春の気持ちとは裏腹に、眠気を誘うような心地よい静けさがある日の午後、お寺でお祈りをしていた。だがいつここに御利益ごりやくはなく、お春の心は平穩とは程遠かった。あるとき、若い多少子どもじみたところのある僧侶が、意気消沈して祈願しているお春を興味ありげに見つめていた。その男はお春のことを知っていたが、お春はその男を知っているわけではなかった。お春はみごとな踊り手で、その人生は喜びに満ちたものだと思っていたのに、最近になってお寺に頻繁にやって来ていたので、何かあったのかなと心配していたのだ。僧侶はお祈りが終わるの

を見計らってお春に近づき、手を合せてお祈りをし、気持ちを落ち着かせようと話しかけた。すると、お春は結婚しているが、子どものためにお祈りをしているのではないことが分かった。先祖のためであるのはそれまでと同様であったが、はたして、それ以外に何のために来ているのだろうか？ そのことを尋ねると、お春は突然涙を流し、返答しようとはしなかった。

敏感で知的な僧侶の顔は一瞬暗くなったが、大人気おとなげなく泣いているたいいていの人たちよりもお春が聡明なのではないだろうかと思った。お春は困難にぶち当たり、悩んでいるにちがいない。予想通り、お春は僧侶の深遠な知識の一端を理解し、微かな希望を見出した。シッダルタ・ガッタマの仏の哀れみに接し、お春の顔

は輝いた。僧侶はお春を立ち上がらせ、座している仏像の前に連れて行つた。そこで分かりやすい言葉を用いて、後年釈迦しゃかと呼ばれたガッタマの誕生をはじめ少年時代や壮年期、悲惨な世の中に対する嘆き、そして世界共通の真理の発見について話した。「生にしがみついていてだけの人生というのは、悪である。人間の肉体は幻想であるが、人間の精神は前世からの無数の苦悩に耐えて永遠に生きるのである。つまり肉体は滅ぶが、その際に精神は肉体から離れ、涅槃ねはんの世界に移動する。涅槃とは極楽の状態をいい、心の平静から生じるとも言われぬ精神的な喜びが、前世からの苦悩に疲れはてている精神を落ち着かせる。釈迦ができたのだから、お春もそうすることができるとも思えない。

つまり、自分自身を無にして涅槃の世界に入るのである。僧侶は以上のようなことを話したあと、手を合わせてお祈りをした。お春は僧侶の仏教の英知にかすかな光を見出し、少し心安らかな状態になったものの、まだまだ涅槃の世界には到達していなかった。

言葉で表わせないような平穏な顔をしてそびえ立っている優しそうで神秘的な釈迦を、お春は見つめていた。何という安らかで、温和な顔をされているのだろう！顔をじっと見ながら、僧侶の言った「生にしがみついているだけの人生は悪である。極楽の状態である涅槃の無我の境地になることで、心安らかな最高の精神的喜びが得られる」という言葉を思い浮かべていた。

僧侶は三回もお春の様子を見に来たが、まだひざまずいて、聖なる釈迦の実に素晴らしい顔をじっと見つけている彼女の姿を目撃した。また複数の信者たちは、お春の顔が神々しく輝き穏やかな表情になっているのを見て感動した。

お寺の中庭にある噴水が幻想的に飛び散り、その影が長く延び、辺りはうす暗くなり、静けさがいつそが深まった。お春は寛大な釈迦の前にひれ伏したあと、立ち上がった。このときには、自分と世間の人々に対して平常心でいることができ、気持ちちが和らいでいた。お寺の石段のところでも少し立ち止まり、残された最後の小銭でそこにいた年配の女性から鳥かごに入っていたすべての雀すずめを買い取った。そして一羽ずつ涅槃の

世界に行けるように小声でお祈りをささげ、空に飛ばして自由の身にしてあげた。

お春の例のひいき客が、次のように絶叫していた。
「ああ、放浪者で迷える子羊であるお春よ！ 茶屋での舞踊に再挑戦だ！ ああ、人を夢心地にさせるような理想的な美形のお春よ！ 幸いなるかな、眺めているだけでお春のとりこだ！ お春の優しさや美しさを満喫するだけで、幸せ者だ！ 人間のなかでも最高に幸せ者だよ！ だってお春がまたやって来て、恋の奴隷にしてくれるんだから！ 人類に喜びと誇りを与え、すべての動物を支配し、人間の勝利者であるお春よ！ ときどきするような美しさや燃えるような情緒、ものすごい情熱の持ち主であるお春よ！ 最高にすてきで

威厳があり晴れやかで、舞妓のなかでも最高に優雅で優しく純粹であるお春よ！ 皆さま方よ、喜ぼうよ！ お春が戻ってきたんだ！ 大いに喜ぼうよ！ 皆に元気を与えてくれる、華麗な舞妓であるお春！ 芸者や舞妓の最高峰であるお春を満喫しようよ！」

お春の復帰公演についての熱狂ぶりは、相当なものであった。今晚復帰といううわさがあちこちに広まり、かつてないほどひいき客が集まつてきた。お春は、復帰公演において意気揚々としていた。悲しさと自尊心が多少入り混じってはいたが、思いやりのある上品さがあり、観客から敬意を払われていた。大観衆を収容するために、茶屋は、襖ふすまがすべて取り払われ、一つの大ホールのように改造された。それでも部屋の中は

息苦しかった。お春の演技は実にみごたなもので、過去の自分を完全に覆い隠していた。それまで以上にお春は美しく、楽しそうで、かつ機知にも富んでいた。舞台のあいだの休憩中でも、才気あふれる即興の会話と温厚な冗談で、観客を笑いの渦に巻き込んでいた。夜も深まつてくるにつれ、一段とお春の知られざる上品さや魅力、栄光が現われてきた。そして拍手喝采ののち、期待と畏敬の念のために、観客は静まり返り、お春は十八番の「忠臣蔵」の舞踊を迎えるだけとなった。

三味線が荒々しく鳴り響き太鼓がとどろくと、お春が登場し舞踊が始まる。残忍で横柄な侍の血が、再び血管の中を火のように勢いよく流れた。そうすると観

客は、魔法にかかったかのように再び中世の幻想の世界へと入り込んだ。お春の舞踊における力強さ、迫真性、感情移入は群を抜いていた。大胆にも、それまで夢にも見なかった高揚感を、即興で感情の全音域を用いて全身で表現した。このことにより、心情と芝居が一体となり、今まで以上に調和のとれたものになった。

お春は、心情的に矛盾した混乱状態にある大石を次から次へと演じていった。中世の真の騎士道精神が、ますます強くなっているのは明らかだった。観客は、大石が本物の人間としての絶頂期を力強く歩いている姿をずっと見守っていた。大石は疑念や恐怖感をはじめすべての人間との関わりを廃し、真に仏への道を歩いているのである。観客は、利己的な自我を忘れ、極

楽の境地に高められていった。そしていよいよ、最高の山場が訪れることになる。「しっ！」という声が聞こえ、見物人の心は直感的な期待感で激しく揺さぶられて悲痛な気持ちになり、すすり泣きが聞こえてきた。

切腹の前にお春の顔の表情が変わった。天使のような感謝の気持ちと快活さで表情が明るくなり、まぶしすぎてほとんど見つめられないほどで、この世のものとは思えないようであった。最終章が始まるにあたり、三味線の低いかすかな音がしだいに大きくなり、悲痛な思いのすすり泣くような音を出した。お春が父君の刀をそつとなでると、観客は期待感から身震いをする。お春は大石を死の世界、つまり静寂の涅槃の世界に誘う。体は小刻みに揺れ、顔の表情は極楽浄土に行ける

喜びで輝いている。切腹の準備のために、お春は腰を下ろして身構える。そして伴奏が始まり、ますます大きな音で鳴り響く。一瞬、上のほうから刀が素早く振りおろされ、血が力強く飛び散った。

心配事のないような安楽の夜の心地よい静寂が、苦悩のあまりすすり泣く大勢の声に引き裂かれる。「ああ、悲しいよ！ とても悲しいよ！ 仏のようになすてきなお春がもういないんだから！」

「江戸湾騒動」(1903)

劇場通りのどこかでなくしてしまったのだ。人通りの多い本通りを横切っている運河の一つに架かった橋の上で、少し乱暴に押されたような気がしていた。目尻が上がった手の早いどこかのスリが、サイフに入っていた五十銭余りのお金を見てちようど今頃、しめしめとほくそ笑んでいることだつてありうる。でも自分自身が不注意でなくしてしまったとも考えられないことはない、と思ったりもした。

かすかな望みを胸に抱いて、二十回もあらゆるポケットを捜してみたが、サイフは見つからなかった。何も入っていないズボンの後ろポケットの中を、手はさ

まよっていた。そうしていると、べらべらよくしゃべる食堂の店主が発狂したように、「二十五銭！二十五銭払え！二十五銭だよ！」と怒鳴っている光景を悲しげに眺めていた。

「そんなことを言つたつて、俺のサイフがないんだよ！」と若者は反論した。「きつとどっかになくしたんだ」

そうすると、店主はかんかんになって手を振り上げ、かん高い声でまくし立てた。「二十五銭！二十五銭！二十五銭払え！」

すでにそのときには、かなりの数の野次馬たちに取り囲まれており、アルフ・デイヴィスにしてみれば厄介なことになっていた。

「ささいなことで、馬鹿げている」とアルフは思った。大したことでもないのに騒ぎすぎだ！　だが、ここできっぱりと何かをしなければ。あの野次馬たちのあいだを猛スピードで通り抜けて逃げ去るといふ考えや、文句を言うやつは誰でも殴りとばすといふことも一瞬思い浮かんでほしかった。ところが、このようなことを見透かしているかのように、ずんぐりとした食堂の従業員の一人が片方の目で意地悪く睨みつけながら、腕をつかんだ。

「さあ、払え！　すぐ、払え！　二十五銭だ！」と、店主は怒り狂って、がらがら声で怒鳴り散らした。

アルフも、悔しさのあまり頬が紅潮していたが、意地であるものを捜そうとした。サイフは諦めていた

が、どこかに散らばっているかもしれない小銭に最後の望みをかけようと思ったのだ。すると、上着にある小さな小銭用ポケットの中から、十銭硬貨一枚と五銭銅貨一枚が見つかった。さらに最近十銭硬貨をどこかになくしていたことを思いだし、小銭用ポケットの縫い目に切りこみを入れると、裏地の奥のほうからその硬貨も見つかった。これでやっと全部で二十五銭になり、夕食代を払える金額が手元にそろった。そこでお金を渡すと、店主はその小銭を数え終え急に静かになり、それどころかこびるようにお辞儀をした。野次馬たちも全員こびるようにお辞儀をして、いつの間にかいなくなっていた。

アルフ・デイヴィスという若者は、十六歳になった

ばかりで、アメリカのスクーター船（二本マストの帆船）である『アニー・マイン』号の船乗りであった。その船は横浜に寄港しており、旬のアザラシの肉をロンドン向けに船積みをしているところであった。これで上陸するのは二度めになるのだが、東洋人が当惑しているのを垣間見るのは初めてだった。若者は、頭を何回もさげるのを見て笑っていたが、すぐあとに別の厄介な問題に直面せざるをえなかった。どうやって自分の船に乗りこむことができるのか？ そのときはもう夜の十一時になっており、船に備えつけの小型船など一隻も岸には見あたらなかった。おまけに日本人の船頭を雇うことも、ポケットにはもうお金がまったくなかった。考えられなかった。

船員仲間をなんとか捜そうと、アルフは栈橋さんばしのところまでやって来た。横浜では長い埠頭ふとうなど一つもない。船舶は錨いかりにつながれて停泊しており、数百の短足の者たちが客を小型船に乗せて往復することによって生計を立てている。

サンパン船（小型平底船）に乗っている十数人の男や子どもたちがアルフを呼びとめ、乗らないか、と声をかけた。アルフはかぼそい脚の人のよさそうな、最も愛想あいそがいい年配の男が乗っている船を選んだ。そのサンパン船に乗りこみ、腰を下ろした。とても暗かったので、老人が何をしているのかわからなかった。でも、船が岸から離れて出港する支度したくなどどうやら何もしていないようだ。ついに男は足を引きずってアルフのも

とにやって来て、顔をのぞき込んだ。

「十銭」とその男は言った。

「うん、わかっているよ。十銭だろ」とアルフは、ぞんざいな返事をした。「でも、急いでよ。アメリカのスクーター船までだ」

「十銭。すぐ払ってよ」老人はそう言い張った。

「今すぐ払え」という悪意に満ちた言葉に、アルフは全身に血がのぼり、「アメリカのスクーター船まで連れて行ったら払うよ」と怒鳴りつけた。

ところが男はしつこく前に立ち続けて手を出し、「今、十銭払ってよ」と言うだけであった。

そこでアルフは、真意を説明しようとした。「お金は今は一銭も持っていない。サイフをなくしてしまった

んだ。けど、お金を払う気持ちはある。アメリカのスクーター船まで乗せてくれれば、そのときすぐに支払うつもりだ。いや、アメリカの船にすぐに乗船しなくともいいんだ。船仲間を呼ぶよ。そうするとまず最初に十銭を支払ってくれる。それから、乗船する。もちろん、それでいいだろ」

以上のような説明に対し、その人のよさそうな老人は、「今すぐ、十銭払ってよ」と返答する。そのうえさらに困ったことに、他のサンパン船の男たちが棧橋の階段に腰を下ろして、じっと二人の会話に耳を傾けているのだ。

アルフはくやしくなり、かっとして立ち上がると、サンパン船を降りようとした。すると老人は、袖に手

をかけて引きとめ、「じゃあ、代わりにシャツをくれ。そうすれば、アメリカのスクーター船まで乗せるよ」と申し出てきた。

まさにそのとき、アメリカ人としてのアルフの独立心が胸の奥深いところから炎のように燃えあがった。アングロ・サクソン人というのは、生まれつき強制されて何かをするのを嫌う人種なのだ。だからこのことはアルフにとって、まったく強盗に遭遇したのと同様であった。十銭はアメリカの六セントに相当し、シャツは二ドルも出して購入したものであった。しかもそのシャツは質の良い物で、また新品であった。

アルフは何も言わずに男に背を向け、棧橋の端のほうまで走っていった。野次馬たちはげらげら笑いなが

ら、すぐ後を追いかけてきた。ほとんどの者たちはがっしりしていて筋肉質で、七月の夜はうだるような暑さだったので、最小限の服を身に着けている程度であった。海で働く者はどんな人種であっても、荒っぽく乱暴なものである。そのような波止場で働く大勢の者たちに囲まれて、日本の大都会にある棧橋の端っこで真夜中に外にいるのがいかに危険なことであるかということを、アルフは強く感じた。

もじやもじやの黒髪と残忍な目つきをした大男が、やって来た。その他の者たちはその男の後ろからついて来て、次のような話に加わった。

「靴を渡せ」と、その大男は言った。「すぐにおまえの靴をよこせ。そうすりゃ、俺がアメリカの船まで乗せ

てやってもいいぜ」

アルフは首を横に振った。すると野次馬たちは、申し出を受け入れるようにと大声で叫んだ。だがアングロ・サクソンの体質のために、人に威嚇いかくされたり苛めいじられたりすることはありえないことだ。進んで立ち向かうことはあっても、他の人種に追いつめられることは白人の誇りが許さない。だから、男たちがアルフに強制的に何かをさせようとしても、白人の強情な頑固さをわき起こさせるだけであった。わびしい期待だけで行動しているこのような男たちと、同様の性質をアルフも持っていた。人里離れた栈橋で星空の下、肩で押し分けて獲物を狙っているような連中に包囲されてはいたが、服のひと縫いでもぶんどられるという侮辱

に屈服するぐらいなら、死んだほうがまだと心に決めていた。これは物の値段の問題ではない。人の正義が危うくなっているのである。

そのとき野次馬たちの誰かが、後ろから強い力で押してきた。アルフは、目をぎらぎらさせて、急に後ろを向いた。そうすると、野次馬たちも不本意ながら退却した。ところが、連中たちはますます騒々しくなってきた。アルフの身に着けているあらゆるものを、次から次へと要求するようになったのだ。ついにこのような要求は、男たちのえらく健康的な肺から思いつきり、それも一斉に発せられた。

アルフは、それまでずっと黙っていたが、危険な事態になっており、逃げるが勝ちだと思った。そして断

固たる闘争心あふれる顔つきと、先のがつた鋼鉄のようなきらぎらした目つきで、体を堂々と大胆に身構えた。こうした対決姿勢は船乗りたちに十分に伝わり、アルフが棧橋の岸の端に向かつて歩きだすと、道を空けざるをえないようになった。けれども船乗りたちは、それまで以上に大きな声で叫んだり笑ったりしながら、アルフのまわりをぞろぞろとついて来た。そのとき、アルフと同じぐらいの背格好と体格の若僧が、ずうずうしくも頭から帽子をひったくってしまった。だが、帽子をかぶる前にその男はアルフに肩を強打され、石の上に転倒させられてしまった。

帽子は若僧の手から離れ、多くの野次馬の足元に落ちて見えなくなってしまう。アルフは一瞬、「帽子を

奴らの手に渡すことは、船乗りとしての誇りが許さない」と考えた。帽子が飛んでいった方向に行くと、

強そうな男が裸足はだしで踏んづけているのがすぐにわかった。その男は、自分の体重を無神経にかけていた。アルフは、隙を狙って帽子を取り出そうとしたが、うまくいかなかった。そこで脚を押しつけようとしたが、男はぶつぶつうなっているだけであった。その対決はまさに真つ向勝負で、アルフはその挑戦を受け入れた。男の後ろにすばやく片方の脚を置き、胸に向かつて肩を強く打ちおろした。この一瞬の力強い一撃で男は耐えられなくなつて、後方に投げつけられた。

このようにしてアルフは帽子を取り返して、拳骨げんこつを振り上げた。そして、後方からの攻撃を防ぐために体

を回転させると、そこにいた連中たちはあわてて飛び上がり退却した。このことがまさに望むところであった。アルフと岸の端には何もなかった。棧橋は狭かった。横を通り過ぎようとしている男たちに真つ向から立ち向かい拳骨で威嚇しながら、アルフは退却していた。後ろ向きに歩きながら男たちを食い止めるというのは、はらはらどきどきすることであった。でも世界じゅうの浅黒い人種は、今日まで白人の鉄拳に敬意を払うことを学習してきた。アルフに勝利をもたらしたのは、自分の攻撃的な戦いぶりというより、多くの白人の船員たちが過去に戦ってきた闘争であった。

棧橋と岸が隣接しているところには港警察署があり、アルフは小柄でござつぱりした担当の警部補をからか

おうという気持ちもおおいにあり、明かりがついた執務室に後ずさりをして入っていった。サンパン船の男たちは静かでおとなしくなり、開けっ放しにしてあるドアの前で、まるでハエのように群がっていた。そこからは、中でどんなことが起こっているのかや、何が話されているのかがよくわかった。

アルフは、自分の窮地を簡潔に説明し、異国での外国人の特権として、警部補に警察の船でアメリカの船まで連れて行ってくれるように要求した。すると、すべての規則をそらで覚えていた警部補は、港の警察が渡船業者とせんではないということや、警察の船には時刻に遅れた一文無しの船員を自分の船まで送っていくような役目はないということの説明した。そのほかに、サ

ンパン船の男たちは根っから強引であり、法律の範囲内で商売をするのであれば警部補として何もできない、とも述べた。前もって船賃を集めるのはサンパン船の男たちの権利であり、客を乗せて最後に料金を徴収するようにには誰も命令できないのである。アルフはその正当性は認めたが、命令ができないのなら説得してほしいとお願いした。警部補はその願いを受けいれ、警察署の玄関で野次馬たちに話しかけた。ところが連中も、自分たちの権利は熟知しており、演説が終わると、例の憎悪を引き起こすような「十銭！　すぐに払え！　今すぐに払え！」と、一斉に叫んだ。

「やはり、何もできないね」と、警部補は言った。ちなみにその英語は完璧なものであった。「でも、危害を

与えたり嫌がらせはしないように警告しておいたの
で、少なくとも身の安全は確保できたと思う。もう真
夜中を過ぎており外は暖かいので、どこかで横になっ
て睡眠を取ったらどうかね。規則に違反していないの
なら、警察署内で寝かせてやるんだが。。」

アルフは、警部補の親切と丁寧な言葉に感謝したが、
サンパン船の男たちは自分たちの人種としての誇りと
執拗さを喚起かんきしており、問題はそんなに簡単には解
決しないと思つた。夜に道端で寝ることは、敗北を認
めることでもあつた。

「サンパン船の男たちは、俺をアメリカの船まで連れ
て行くことを拒否してるんですか？」と聞くと、警部
補はうなずいた。「警察の船でも連れてつてくれないん

です。ね」とも聞いてみたが、同様であった。

「それでは、俺が勝手にアメリカの船までたどり着くことを阻止することができるといふのは、規則にはないですね」と念を押すと、警部補は困った顔つきをし、

「連絡船がないんだよ」と答えた。

「そんなのは問題じゃない」とアルフは、かっとなつて言い放つた。「自分がアメリカの船にたどり着ければ、

皆が満足し誰にも危害を加えないよね」

「そうだ、その通りだ」と、困りきつた警部補は返事をし、次のように続けた。「でも、自分でアメリカ船のところまで行くことなんてできやしない」

「じゃあ、見ていてよ」と返事をした。

アルフは、帽子を警察署の床に置いた。そして底の

浅い靴を蹴つて左右に脱ぎ捨て、ズボンもシャツも放り投げた。

「次のことをしつかり心に留めておいてください」と、鳴り響くような声で言い放つた。「アメリカ合衆国の市民として、皆さん方や横浜市、そして日本政府がそれらの衣服などに全責任を持つものとするという判決を下す。おやすみなさい」

びつくり仰天している船員たちを脇にかき分け、玄関口を突進して、棧橋まで走つていった。野次馬たちはすぐに我に返り、新しい事態になったので歓喜し大声を出しながらあとをついて来た。このことは横浜の船員たちのあいだで、忘れられない夜の出来事となった。岸の端までアルフは一直線に走っていき、間髪を

容れずきれいに整然と海に飛びこんだ。そして、力強い片抜き手泳法（水をかいた腕を前方に返す際に、横体で上方の片腕だけ水面に抜き出す泳法）で水をかいて泳いだ。好奇心からちよつと立ち止まると、暗闇の棧橋くらやみのあたりから呼び止める声が聞こえてきた。

仰向きになり、海に浮かびながら次のような声を聞いた。「わかった、わかった！」と騒々しい声を聞き取ることができた。「すぐに払わなくていいよ、あとでいいよ！」戻って来い、すぐに戻って来い！あとで払ってもいいよ！」

「もう結構だ」と、アルフは言い返した。「二銭も払わないぜ。あばよ」

それから、『アニー・マイン』号がどこにあるのか突

きとめようと、あたりを見まわした。船は、少なくとも一マイル（約一・六キロメートル）は離れているだろう。暗闇の中で方向や位置を正確にとらえるのは、容易なことではない。兵士だけが扱える炎に、最初に目が留まった。あれは、アメリカの軍艦『ランカスター』号にちがいない。その左後方のどこかに、『アニー・マイン』号がきつとあるのだろう。左のほうには、三つの明かりが並んでいるのがわかった。でもあれは、捜しているスクーター船ではないだろう。その間、アルフの頭は混乱していた。そこで仰向きになり目を閉じて、昏間に見た港の情景を頭に思い浮かべようとした。すると喜びのあまり荒い息づかいになり、体を元に戻した。あの三つの明かりは、大きなイギリスの不

定期貨物船にちがいないと思った。ということは、スクーナー船はその三つの明かりと『ランカスター』号の間のどこかにあるにちがいない。ずっとその方向を見つめていたが、ほの暗いだけであった。だが見当をつけた一点に目を移すと、一つの明かりが燃え上がった。『アニー・マイン』号の停泊灯であった。

空には星が輝き、快適な遊泳であった。周りの空気も海水の温度と同じぐらいで、生ぬるいミルクの温度ほどであった。海水の強力な塩味が口の中で感じられ、そのひりひりとした痛みが手足にも伝わってきて、猛烈な心臓の絶え間ない鼓動も加わり、生きていることが実感できて幸せな気分になった。

こうしたすばらしいことを除けば、遊泳は平穏なも

のであった。右手に明るく光っている『ランカスター』号を通り過ぎ、左手にはイギリスの不定期貨物船があった。まもなく『アニー・マイン』号が頭上にぼんやりと大きく視界に入ってきた。そして船にぶら下がっている繩梯子なわばしこを握りしめ、音をたてないように甲板かんばんの上まで自分の体を持ち上げていった。まわりには誰も見当たらなかった。調理室の中に明かりがともつたので覗のぞいてみると、船長の息子が一人で停泊当直の任についており、コーヒールを入れていたところであった。アルフは、船首楼せんしゅろう（船体の船首に設けられる上甲板より一段と高い部分）のほうに向かって歩いていった。寝台には男たちのいびきが響きわたっており、その閉じこめられた船内に入ると、耐えられないほどの高温

になっていると思った。だから、薄い綿のシャツと胸当てつきズボンに着がえ、毛布と枕を小脇に抱えながら甲板の上がっていき、船首楼の先端部分に近づいた。

アルフはそこどうとうとしてしていると、こちらの方にやって来る小型船の音と誰かが停泊当直者に話しかけている声に目が覚めた。それは港警察の船であり、わくわくするような会話が展開される予感がした。予想通り、船長の息子は差し出された衣服が誰のものかわかった。船員のアルフ・デイヴィスのものだったのだ。「何があったんですか？ いいや、アルフ・デイヴィスは乗船していません。上陸していると思いますよ。そうじゃないのか！ じゃあ、海におぼれたんじゃないか！」その後、警部補と船長の息子の会話は同

時に行われたので、アルフにはちんぷんかんぷんであった。そして二人はやって来て、乗組員たちを起こした。すると、アルフ・デイヴィスは船首楼にはいない、と船員は眠くてぶつぶつ言いながら返答した。船長の息子が横浜警察とその行動に対して怒りを増大させると、警部補は絶望的な調子で規則について説明した。

アルフは、船首楼の先端部分から立ち上がると、手を差し出して次のように言った。

「その衣服を受け取りましょう。早速船舶までお持ちいただき、まことにありがとうございます」

「おまえをここまですぐ連れてきてくれなかったのか、どうしてもわからないだ」と、船長の息子は言った。

それに対して警部補は、一言も言わずに少しおどどしたような態度で、衣服を正當な所有者に手渡した。

翌日、アルフが横浜に上陸しようとしたときには、

大声を出し身振り手振りよろしく、えらく礼儀をわきまえたサンパン船の男たちが自分の船に乗ってもらおうと、異常なほど必死に声をかけてきた。誰一人として、乗船して「すぐ払え」とは言わなかった。それどころか、アルフが棧橋に降りる際に例の十銭を手渡そうとすると、直立不動で首を横に振った。

「結構ですよ。支払わなくてもいいです。無料です。

とても素晴らしいお方なので、お金などいりません」

その後『アニー・マイン』号が港に滞在している期間中、サンパン船の男たちは、アルフ・デイヴィスの

手から一切お金は受け取らなかった。アルフの勇気と独立心に対する賞賛の気持ちから、港に自由に出入りできる特権を与えたのであった。

「誇り高き」家系」(1910)

パーシヴァル・フォードは、どうしてこんなところ
にやって来たんだろう、と後悔していた。ダンスもし
ないし、軍人が特別好きなわけでもない。ホノルルの
海岸にある、ただっ広いラーナイ(ベランダ)を意味す
るハワイ語で、手や腰をくねらせて踊っている連中全
員と顔なじみなのだ。のり付けをしてアイロンがけを
したばかりのまっ白な軍服を着た将校たちや、黒と白
の服に身をまとった一般市民、そして、肩や腕をあら
わにしている女性たちが熱狂している。(二十世紀に入
り王朝時代が終わりを告げると共に、白人が先駆者となり観
光開発が始まる) アメリカの第二十艦隊が二年間ホノル

ルに駐留した後、アラスカにある新たな基地に向か
おうとしている。ハワイ諸島(一八九八年にはアメリカ
領になっていた)の要人の一人であるパーシヴァル・フ
ォードは、これらの軍人とその女と否いやが応でも、知り
合いにならざるをえないのだ。

それにしても、「知っている」ということと「好きで
ある」ことのあいだには、深い越えられない溝がある
ものだ。軍隊の女に接し、パーシヴァル・フォードは
たいそう驚いた。好みの女性像とは多くの点でまるっ
きり異なっているからだ。年配の女たちや、良家の未
婚の女、眼鏡をかけた少女、そして教会や図書館、幼
稚園の委員会でお会いする年齢層のたいへん真面
目な女たちとは、雲泥うんでいの差がある。これらの女たちは、

寄付や助言を求めてへいへいとしながらすり寄ってきてたのである。彼はハワイの財界で最高の地位にあり、莫大な資産と優越感をもって、普段接しているこのような女性たちを思いのままに操っていた。だから、それまで女性を恐れることなど皆無であった。そのような女性との秘めごとは、ベールに包まれていて表面化することなどなかった。でも、軍隊の女の場合、一般の女性とは異なり、独特の上品さ以上のものがあつた。そのようなことに対して、彼はあざけり笑っており、嫌悪感を覚えていた。軍隊の女ときたら、肩や腕をあらわにし、目はきりつと前を向き、バイタリテイにあふれ、女性であることを武器に挑発的な態度をとっており、神経を逆なでするものだった。

軍隊の男どもとも、馬が合わなかつた。人生を軽んじて、酒やタバコをやり、肉体の本質的な下品さを主張して、女に劣らず恥さらしであるからだ。考えただけで身の毛がよだつたのだ。相手も同様に毛嫌いをしていた、と思えた。軍隊の連中が、ほくそ笑んでおり、同情したり、嫌々ながら付き合っている、といつも感じていた。彼らが近寄り、フォードの欠点を強調したり、彼がもつていないもの——そのことに感謝しているのではあるが——に注意を向けさせようとしているようにも見えた。まるで軍隊の女どものように嫌な存在なのだ。

実際のところ、パーシヴァル・フォードは女性的な男性でないの言うまでもないことだが、男の中の男

というわけでは決してなかった。そのことは一見しただけで明らかだった。立派な体格をしており病気とは無縁で、体の異常も特に見当たらなかったが、全体的に生気が感じられないのだ。また、人付きあいもよくなかった。長く狭い顔や薄い唇、やせこけた頬、突き出た小さい目に活気が見られなかった。彼のぼさぼさした頭髮は、くすんだ薄茶色で、まっすぐに伸びているが毛は薄く、地味で物惜しみをする性格を物語っていた。このことは、上品ではあるがやせこけているわし鼻も同様のことが言える。血の気が少ないというところが、彼の性格を消極的なものにしてはいたが、ただ一点だけ極端な面があった。それは、正義感が強かったことだ。何が正しい行ないなのかについて思い悩んで

いた。一般の人たちにとって、愛し愛されること
が大切なことであるのと同様に、正しいことをするこ
とが性格上、譲れない一線であったのだ。

パーシヴァル・フォードは、余興が行われていたラ
ーナイ（ペランダ）と海岸の間にあるイイゴマメ稲子豆の木陰に腰
を下ろしていた。そこからダンスをしている人々を見
渡し、そのあと海辺の方をよく見ると、美しく輝く波
が心地よい音をたてており、南十字星が放つ明かりが
衰え地平線に薄暗く照りつけていた。そのような状況
の中で、女どもがラーナイで肩や腕をあらわにしてい
る姿を見るにつけ、我慢がならなかった。仮に自分に
娘がいても、そんな格好は絶対にさせない、と思った。
だが、このような考えは実際の娘を念頭にはおいてい

なかったので、机上の空論にすぎなかった。腕や肩をあらわにした自分の娘など、一度も見たことがないのに、そういう思考パターンに陥っていた。彼はどういうわけか一度も結婚に縁がなく、苦笑していた。三十歳にもなるのだが、恋愛経験は皆無^{かいむ}で、結婚を空想の世界のことというより下品なことと考えていた。誰でも結婚なんてできるんだ。砂糖きび農園（二八三五年に最初の農園ができ、農業が経済の中心になるにつれ、ハワイ諸島の政治や社会の仕組みも変化していった）や米作農園で汗水たらして働く日本人や中国人の日雇い人夫たちでさえ、結婚している。しかも初対面で必ず結婚を決めているのだ。行動範囲が狭く、結婚以外にすることがなかったのかも知れない。同様のことが、軍隊の

男どもや女どもにも言えるのである。彼の場合には、もっと高尚なことがいろいろあった。他の連中とはまったく次元が違う人種なのだ。自分の置かれている境遇に満足し、誇りに思っていた。つまらない恋愛結婚を奨励するような家柄ではなく、「高尚な義務感」と「大義への忠誠心」を重んじていたのだ。父親のアイザック・フォードは、恋愛結婚ではなかった。恋愛など経験してみる価値がまったくないどころか、狂気のさたである、という考えであつたのだ。キリスト教を異教徒に伝道するために召集を受けたときも、結婚したいと思うことは一切なかった。この点で、息子とも似通っていた。が、キリスト教伝道委員会は儉約思考が強く、特にニュージーランド地方ではその傾向が顕著

であった。調査の結果、結婚している宣教師（ハワイ

た。

王朝時代には、宣教師たちが高い地位につき、人々の行動や考えを変えていくほど強い影響力を持つようになったのほ
うが独身の宣教師よりも、一人当たりで計算すればよ
り費用が少なくてすみ率的である、と判明した。そ
こで委員会は、彼に結婚するように命令を下した。さ
らに、配偶者も世話してくれた。その女性も熱心な宣
教師であったが、結婚のことはいっさい眼中になく、
ただ異教徒への伝道活動に興味があるだけであった。
二人はボストンで初めて顔を合わせた。キリスト教伝
道委員会が見合い場所をはじめ、何から何まで準備し
てくれ、週末には結婚をして、ホーン岬（南米大陸の
最先端の岬）經由の長い航海の旅に夫婦そろって出発し

パーシヴァル・フォードはそのような家柄の出身で
あることを誇りにしていた。生まれつき身分が高く、
崇高な特権階級を自認していたのだ。父親にたいする
誇りも相当なものであった。厳格で意気揚々としてい
る父親のアイザック・フォードの姿が息子の脳裏に焼
きついている。机の上にはキリスト教の戦士の人形が、
そして寝室には父親の肖像画が飾られていた。その肖
像画は、国王の下で総理大臣を務めたときに描かれた
ものであった。彼はこのような高い地位を要求してこ
の世の富を独り占めにしたのではなく、総理大臣とし
て、また後年は銀行家としてキリスト教の活動に多大
な貢献をした。ドイツ人やイギリス人などの貿易上の

仲間たちは、父親のアイザック・フォードが金儲け主義であると冷笑していたが、息子はまったく見当違いであると主張していた。ハワイの先住民たちは、封建時代の束縛から急に自由な身になり、不動産の性質や重要性について何の知識もなかった。そこで先住民たちの広大な土地が剥奪はくたつされるといふ危険が迫ってくると、彼は不動産業者と先住民の仲介をして莫大な利益を得た。不動産業者たちがアイザック・フォードのことを思い出したがらないのは、無理からぬことであった。が、彼は自分の莫大な資産を自分だけのものとは考えていなかった。自分のことを神の財産管理人であるという思いで、得た財源を使って学校や病院、教会を建設した。不況の後、砂糖が四割も利益をだした

り、設立した銀行の経営がうまくいき鉄道株を所有するまでになったのは偶然のことであった。とりわけ、一エーカー（約四キロメートル）当たり一ドルで購入したオアフ島にある五万エーカー（約二十万平方キロメートル）の農園が、十八ヶ月ごとに一エーカー当たり八トンもの砂糖を生産するようになったことも、同様であった。実際のところ、アイザック・フォードは英雄であったのだ。裁判所の前にあるカメカメハ一世（ハワイ諸島を統一して、一八一〇年にハワイ王国を建設、初代国王となった人物）の像の隣に父親の像が並んでいて、もいぐらいだ、と息子はひそかに思ったりしていた。父親はこの世から姿を消してしまっただが、息子は父親のような風格はないにしても、少なくとも頑固にすば

らしい仕事を続けていた。

パーシヴァル・フォードはベランダに視線をもどした。そして、「短い腰巻きをはいて踊るフラダンスと、肩が出るほど首のラインが低い服を着て踊る自民族のデコルタダンスの違いは何なのか？ 程度の問題なのか？」と自問した。

そんなことをあれこれ考えていると、肩に手が触れるのを感じた。「こんにちは、フォードさん、こんなところで、何をなさっていらっしゃるのですか？ 祭り気分で、ぱつとやりましょうよ」

「そういうものを見ていても、寛大であろうとしているんですよ、ケネディ博士」と、パーシヴァル・フォードは真面目に返事をした。「お座りになりません

か？」

ケネディ博士は腰を下ろし、強く手を叩いた。そうすると、白い服を着た日本人のボーイがすばやく注文を聞きにやって来た。「スコッチウイスキーのソーダ割り」と答え、フォードの方を向いて、「もちろん、注文されることを要求しているわけではありませんよ」

「でも、私も何かいただきますよ」と、フォードはきっぱりと言った。博士は目に驚きの表情を浮かべており、ボーイは返事を待っていると、「レモネードをお願いします」とフォードが注文をした。

博士はおどけて腹から大声で笑い、ハウ・ツリー（熱帯地方の海岸の砂地に生える常緑高木）の木陰にいるミュージシャンをちらつと見た。「あれはアロハ・オーケ

ストラですね」と、博士は話しかけた。「毎週火曜日の夜に、ハワイアン・ホテルでショーをしているんですよ。たいへんな賑わいですね」

全ての楽器を従えて、ギターを奏^{かな}でハワイの曲を歌っている男に、博士は目を奪われくぎ付けになった。その歌い手をじっと見ていると、深刻な顔つきになり、フォードに話しかけているときも表情に変化はなかった。

「ねえ、フォードさん。ジョー君にも少し寛容になってもよいのではないですか。サーフボード推進委員会がジョー君を商談のためにアメリカ本土に派遣する計画に反対しているそうですね。そのことについてずっとお話ししようと思っていたんですよ。計画に賛

成されて、ジョー君を国外に追い出すほうが、あなたにとつて喜ばしいことにちがいないと思っていたんですよ。そのようにして迫害を終わらせるほうがよいのではないですか」

「迫害ですって？」と、パーシヴァル・フォードは不審がつて、まゆをつり上げた。

「あなたの行為をどのように表現しても、勝手ですがね」と、ケネディ博士は話を続けた。あなたはジョー君を何年も迫害しているでしょう、かわいそうに。彼があなたから迫害を受けるのは、筋違いですよ。それどころか、あなたのほうが間違っていることを認めざるをえなくなりますよ」

「筋違いですって？」と、フォードは薄い唇をぐっと

噛みしめて抗議した。「ジョー・ガーランドは、ずばらで怠惰なやつですよ。以前からずっと、浮浪者で道楽者でもあります」

「だからと言って、そんな風にしつこく追い回さなくてもいいでしょう。あなたが大学を卒業して故郷にもどり、非組合員の現場監督として大農園で働いているジョー君にした最初のこととは、首にしたことですよ。あなたは百万長者、相手は月に六十ドルの労働者でした」

「それは最初にしたことではありませんよ」と、パーシヴァル・フォードは委員会活動で話すような調子で、まるで裁判官のように反論した。「最初に警告をしたんですよ。砂糖きび農園の親方は、ジョーが有能な現場

監督であると言っている。私もそのことに関しては何も異論はないんです。不満なことは、勤務外にすることにあるんですよ。ジョーは私がけちを付けるようなことをすることが気に食わないんです。私が設立した教会の日曜学校や夜間学校、裁縫教室が行われている夕方、彼はギターとウクレレを長時間弾きながら、強い酒を飲みフラダンスを踊っている。それは妨害行為以外の何ものでもないこととは思いませんか？ 最初の警告の後、ジョーに偶然出くわしたんです。それは決して忘れられないことです。向こうにある小屋のあたりで夕方出会ったんです。最初にフラダンスの歌に気づいたんですけど、すぐにその光景も目にするこ
とになりました。そこには月の光のもと、みだらな格

好をして踊り狂っている少女たちがいたんです。その少女たちに私は、清い生活と正しい行いについて一生懸命に教えたんですよ。よく覚えていますが、そこにはミッシェンスクール（キリスト教団体が異教徒の多い国に布教の目的で設立した学校）を卒業したばかりの女の子たちが三人もいたんですよ。もちろん、彼を解雇しました。そのことは、ヒロ（ハワイ島東部の市）でも同様でした。世間の人たちは、私が故意にメイスン牧師とフィッチ牧師を説得してジョー・ガーランドを解雇させたと思っているようですけど、それはちがいます。牧師たちが私にそうするように要求してきたのが真相なんです。ジョーは非難されるべき行為により、牧師たちの仕事の邪魔をしたんです」

「その後、ジョー君が汽車に乗っていると——あなたが経営している鉄道ですよ——、わけもなく降ろされてしまった、と聞いています」と、ケネディ博士はパーシヴァル・フォードを非難した。

「そんなことはありませんよ」と、フォードはすばやく返答した。「私の事務所においていただいて、半時間ほど話をしたんです」

「非効率という理由だけで、首にしたんでしょ？」
「とんでもない、不道德な行為をしたので、首にしたんですよ」

博士は、悔しさのあまり歯ぎしりをして、その言葉をあざけり笑った。「君に何の権利があつて、裁判官と陪審員の役を果たすんだい？ 地主制度を理由に、骨

身を削って働く部下の不滅の精神をコントロールできるとでも思っているのかい？ 私は君のかかりつけ医を長年やっているよね。私がスコッチウイスキーのソ—ダ割りをやめなければ、君は二度とお世話にならないと言いだすのを、私が喜ぶと思っているのかい？ そんなことは、ばかばかしいことだよ！ 人生を生まじめに考えすぎなんだよ。また、ジョー君が口論を外部にもらして——君には雇われていなかったが——、自主的にそのことを申し出て罰金を支払うと言っているのに、砂洲での六ヶ月にもおよぶ強制労働を命じたよね。それは彼を見殺しにしたようなものだった、ということが分からないのかい？ ジョー君に、とつてもつらくあたってんだよ。君が大学に入学した初日の

ことを思い出したよ。——私は寄宿生だったんだが、君はただの通学生だったよね。——そのとき、水泳の手ほどきを受けることになっていて、プールに三回だけ潜らなければならなかった。——覚えているかい、それは新入生の誰もががしなくてはならなかった、ごく普通の訓練だったんだ。でも、君は尻込みをして、どうしても泳ごうとはしなかったよね。そのとき、異常なほど興奮して、恐怖におののいていたのをはつきりと思い出すよ。——」

「その日のことは、よく覚えているさ」と、パーシヴァル・フォードは、ゆっくりと切り出した。「手足がガタガタしていたのは本当さ。でも、泳げないと嘘をついていただけなんだ。寒さで震えていただけのことな

んだ」

「君のために奮闘したのは、いったい誰だと思つて
いるんだい？ しかも、君が泳げないのを知っている
と断言し、君以上の嘘までついているんだよ！ ジョ
ー君は、プールに飛び込んで、いち早く君を水中から
引き上げたんだ。他の学生たちが後から飛び込んで来
たものだから、もう少しのところで溺れてしまうところ
だったんだよ！ その学生たちは、そのときになつ
てやつと、君が実は泳げるといふ事実気がついたん
だ」

「もちろん、そんなことは知っているさ」と、フォー
ドは、冷淡に言い返した。「でも、若いときの寛大な行
いが、生涯の悪行を帳消しにするわけではないんだよ」

「ジョー君は、君に悪いことは一度もしていないじ
やないかい？ 個人的なことを、あらかさまにはして
いないという意味だがね」

「していないさ」と、パーシヴァル・フォードは答え
た。「まったく非難の余地がないさ。ジョーに対してこ
れっぽっちも個人的な恨みはもっていないんだ。彼を
取り巻く環境が悪いんだ。それだけさ。生き方自体が
気に食わないんだよ——」

「逆説的に考えると、ジョー君が君の生き方が気に入
らないと主張してもいいことになるね」と、博士は口
をはさんだ。

「そのように考えてもらつても結構だよ。でも、そん
なことは取るに足りないことだ。あいつが馬鹿なだけ

だ——」

「それには異議があるね」と、博士はさらに口をはきんだ。「君がジョー君に意地悪をして、仕事を次から次へと奪っていったことを考えてみてよ」

「ジョーは、ふしだらで不道德なところが問題なんだ」

「ちよっと待ってよ、フォードさん。くどくどと繰り返し言わなくていいよ。君はニューイングランド（米

国北東部の六州）直系の家柄の出であるのにたいして、

ジョー君は半分カナカ人（ハワイの先住民）の血が混じっているよね。君の血は冷たいが、彼には暖かい感じの血が流れているんだ。人生は、人によっていろいろあつていいんだよ。ジョー君は一生、笑ったり歌ったり踊ったりして暮らす主義で、人に対して愛想がよく

寛大かつ率直であるので、人が自然に集まってくる

んだ。それに対して、君は歩いて巡回するラマ教の地蔵車（経文の記された回転式の礼拝器）のように、道徳的に正しいとされていることを着実に実行する主義であるが、道徳的に正しいとされている人たち以外には友人は誰一人としていないよね。道徳的に正しいとされている人たちは、何が正しいかという価値観でつながっているだけなんじゃないかな。その結果、世間の人たちの評価として、君は世捨て人、ジョー君は愛想のよい人ということになるんだ。どちらが人生の勝利者だと思おう？ 人間というものは、仕事があり賃金が十分に得られてはじめて生きられるんだよ。その賃金が不十分なものであれば、その仕事をやめざるをえなく

なり、自殺に追い込まれることは自明の理であるんじゃないかな。ジョー君が現在、君からもらっている賃金はあまりにも低すぎて、このままでは飢え死にすることは明らかだよ。彼と君とは別個の人間なんだ。ジョー君からの人生の分け前である歌や愛のために、君は飢え死にするかい？」

「バカバカしいことだ。そんなことは御免こうむるよ」と、パーシヴァル・フォードは反論した。

それに対して、ケネディ博士は、笑みを浮かべて次のように言った。

「君にとつて、愛とは単なる言葉で、その意味は辞書から得られるものにすぎないよね。現実の愛は、純情で、胸がときめき、壊れやすいもので、そういうこと

を君は分らないんじゃないかい。神が君や私やその他の人間を創りだし、愛も創り出したんだ。話は元もどるが、もうそろそろジョー君をいじめるのをやめてもいいんじゃないかい。そうしないと、君の価値が下がるよ。君がやっていることは、とても卑劣なことなんだ。今すべきことは、ジョー君に援助の手を差し伸べることではないのかい」

「どうして、私がそんなことをしなくてはいけなんかい？」とフォードは要求した。「あなたがすればいいじゃないか？」

「もうずっとしているよ。今も援助の手を差し伸べているところだよ。ジョー君をハワイから追い出すという決定を、キリスト教布教委員会がしないよう君に尽

力をしてもらいたいと思っっているんだ。その他、私は彼のためにメイソン君とフィッチ君も一緒にヒロで働けるようにしてあげたんだよ。今までにジョー君に六つの仕事を紹介してあげたんだが、ことごとく君はジョー君を首にしたんだ。そのことを差し置いても、このことだけは忘れてほしくないんだ。もう少し正直に話してほしい。他人の失敗を、ジョー君のせいにするのはよしな。君はそんなことは絶対にしていないと言いはれるだろうが、それはいい趣味とは言えないよ。大変理不尽なことなんだ」

「何のことか見当がつかないね」と、パーシヴァル・フォードは返事をした。「あなたはひどく興奮して、遺伝に関する不確かな科学理論を振りかざし、ジョーに

は責任がないと主張しているにすぎないよ。ジョーの不道徳には責任がなくて、私の責任が誰よりも重いというのがどうしても合点がっせんがいかない」

「それは繊細さの問題、あるいは好みの問題だね。だから、私の言っていることが、理解不能な

んだよ」と、ケネディ博士は平静さを取りもどした。

「暗にそつとしておくというのは、社会のためにとても良いこともあるが、君は暗に無視すること以上のことをしてしまっているんだよ」

「暗に無視するとは、いったいどういうことなんですか！」

その言葉に博士は激怒した。スコッチウイスキーのソーダ割りを一杯ひっかけた以上に顔は真っ赤になり、

次のように答えた。

「君のお父さんの息子のことだ」

「何を言っているのか、まったく分からないよ」

「これ以上簡潔に説明することなんかできっこないよ。

お望みなら、もつとはつきりと言うよ。アイザック・フォード氏の息子の一人であるジョー・ガーランド君のことだよ。君の弟になるね」

パーシヴァル・フォードは、困ったような様子でじつと座り込み、顔はびっくりした表情であった。ケネディ博士は丹念にその顔色を観察していると、その表情はぎよつとしたようになり、きまり悪そうなものになつていった。

「まさか、知らなかったとは言わないだろうな」と、

博士はついに大声を出した。

フォードの顔色は徐々に灰色に変わり、次のように答えた。「とてもたちの悪い冗談だ。とっても不快だ！」

博士は自分を落ち着かせようとして、次のように説明を加えた。「このことは世間のみんなが知っていることですよ。当然、君はその事実を知っていると思つていました。でも、知らないのなら、もうそろそろ知つておくべきだと考えたんだよ。その事実を頭にたたきこんでもらえて、うれしいよ。君とジョー・ガーランド君は兄弟なんだ。腹違いの兄弟なんだよ」

「うそだ！」と、フォードは大声を出した。「冗談でしょう。ジョーの母親はエリザ・クニリオだよ」(ケネディ博士は、うなずいた)「ジョーの母親のことはよく覚

えているよ。池でアヒルを飼い、タロイモを畑で育てていたんだ。父親は、波止場でごろごろしていたルンペンのジョゼフ・ガーランドさ」(それに対して、ケネディ博士は首を横に振って否定した)「父親は二〜三年前に亡くなったよ。アル中だったんだ。息子のジョーも自堕落な生活を送るようになったんだ。血は争えないね」

「本当のことを誰一人として君に言わなかったんだね」と、ケネディ博士は間まをおいて不思議そうに言った。

「博士、あなたはとてもひどいことを私におっしゃいましたね。とうてい我慢できません。それが正しいということ、証明してください」

「自分自身で証明したらどうでしょうか。向こうにいるジョー君をよく見てごらん下さい。横顔がよく似ているでしょう。ジョー君の鼻など、君の父親のアイザック・フォード氏の鼻とそっくりだ。君の鼻はほっそりしているね。でも、よく見てよ。ジョー君の鼻は多少ふっくらしているが、鼻の輪郭は瓜二つだ」

パーシヴァル・フォードは、ハウ・ツリー(ハワイの数百年という伝説の木)の木陰で演奏している白人とカナカ人(ハワイの先住民)の混血児を凝視した。そうすると照明による効果のせいか、まるで亡霊でも見ているかのように思われた。照らされている顔のつくりの一つ一つが、確かによく似ていた。いやむしろ自分のほうが、あの筋肉隆々で豊かな体型の持ち主の亡霊

であるかのような錯覚におちいった。さらに言えば、

二人の容貌がアイザック・フォードと瓜二つであったのだ。ところが、今まで誰からもそのことを知らされていなかった。パーシヴァル・フォードは父親であるアイザック・フォードの顔の隅々まで熟知していた。頭の中には、父親の縮小模型や肖像画、写真が次から次と走馬灯のように現われた。が、腹違いの弟のジョーの顔をいろいろな角度から何度も観察すると、二人がなんとなく似ているにすぎないとも思えてきた。厳格な父親の容貌が不明瞭で審美的に再現されるのは、まさに悪魔の仕業しわざであった。一方、ジョーが振り向くと、ほんの一瞬であるが、フォードは、亡くなった自分の父親がジョー・ガーランドの仮面をかぶってじっ

と見つめているとも思った。

「それは当然なことですよ」と、ケネディ博士が言っているのを、フォードはぼんやり聞いていた。「長い歴史の中で、いろいろな血が入り混じっているんですよ。世間のことを考えてみれば、当たり前でしょう。船員だって女王と結婚し、王女を出産することもあり、そういうことが繰り返されるのです。特に、ハワイ諸島ではごく一般的なことですね」

「でも私の父親に限って、そんなことはありません」と、フォードは博士の話の腰を折った。

「またそれを言う」と、博士は肩をすくめた。あんたの言っていることは、地球以外の宇宙に生命が存在するということと同様に、ほとんど実体のないものだよ。

アイザック・フォードおじさんが生涯にわたって厳格な生活を送ったかという事は、誰にも分からないことであつて、ましてやおおじさん自身には判断がつかないと思うよ。あんた以上に、理解しにくいことなんだ。

得体の知れないもの、というしかありませんね。ただフォードさん、分かつてほしいのは、お父さんにも多少の荒々しい血が流れていたということです。それをジョー君が受け継いだんだよ。宇宙の得体の知れない生命をすべてね。君はお父さんの禁欲的なところをすべて受け継いだということになる。あんたの血が冷たく、秩序立っており、統制のとれたものであるからといって、ジョー君にいやな顔をしちゃいけないよ。彼があんたのしていることを台無しにするといつても、

そのことの半分は両方の父親のアイザック・フォードさんの仕業なんだからね。でも、お父さんの血はあなたによい影響を及ぼしていることもあるだろう。君がお父さんの右腕だとすれば、ジョー君はお父さんの左腕と言えるね」

パーシヴァル・フォードは沈黙をしていた。ケネディ博士は、黙って忘れかけていたスコッチウイスキーのソーダ割りを飲み干した。向こうの方から、ひっきりなしに自動車のブザーというクラクションの警笛が聞こえてきた。

「ああ、迎えの車だ」と、博士は立ち上がり、次のように話を続けた。「もう行かなくなつては。君を不愉快にさせてしまったことは申し訳ないと思つているが、同

時に満足もしている。あのね、お父さんの荒々しい血はきわめて少量であつたので、ジョー君がすべて受け継いでしまったよ。最後にもう一つ言いたいんだが、お父さんの左手(ジョー・ガーランドのこと)があんたを不愉快にさせても、ジョー君を殴り飛ばさないでほしいんだ。その他のことでは、ジョー君は大丈夫だ。はつきり言つて、孤島であんたかジョー君のどちらと一緒に暮らしたいか、と問われれば、間違いなくジョー君と答えるよ」

幼い子供たちが芝生の上を裸足で走りまわつて遊んでいたが、パーシヴァル・フォードは見向きもしなかつた。ハウ・ツリーの木陰で歌っている男をじつと見ていたのだった。その顔をもっとよく見るために、一

度近づいたりもした。そのとき、シーサイド・ホテルのボーイが、老齢のために足が弱つて、よたよたと歩いてそばを通り過ぎて行つた。そのボーイはもう四十年もハワイ諸島で暮らしていた。フォードは合図すると、ボーイはうやうやしくかしこまつてやつて来た。

「ジョン、ちよつと聞きたいことがあるんだ。ここに座つてくれないかい」と、フォードは言つた。

ボーイは予期せぬ丁寧さにどきもを抜かれて、目をぱちくりさせながら、「はい、ありがとうございます」と言つて、恐るおそる腰を下ろした。

「ジョー・ガーランドとは、いったいどういう人物なのかね？」

ボーイは目をぱちくりさせながらフォードを見つめ、

咳ばらいをして沈黙した。

「さあ、いったい何者なのか言ってくれ」と、フォードは強く要求した。

「冗談でしょう」と、ボーイはやつとのことです声を出すことができた。

「冗談ではない。真剣に聞いているんだ」

その言葉を聞いて、ボーイは後ずさりをしながら、次のように念のために確認をした。「まさか、見当がまったくついていないとでも、おっしゃるのではないでしょうね」

「だから、真実を知りたいんだよ」

「ガーランドさんは…」と、ボーイは切り出したが、急に話をやめて、お手上げ状態という様子で目をきよ

ろきよろさせた。「このことは誰にも聞かないほうがよろしいのではないでしょうか。あなた様はそのことをご存知だと皆んな思っています。だから…」

「だから、なんだと言うんだい」

「だから、ガーランドさんを目のかたきにしておられると、以前から我々はそう思っていたのです」

アイザック・フォードの写真や小画像が、息子の頭の中でぐるぐると回っていた。父親の亡霊に取り付けられているようであった。「おやすみなさいませ」と、ボーイが足を引きずって立ち去るのに、やつとのことです気がついた。

「ジョン」と、パーシヴァル・フォードはボーイを呼び止めた。

ジョンはまたもどつて来て、フォードの前に立った。目をぱちくりさせており、神経質そうに唇を舌でへろへろしていた。

「まだ、肝心なことを話してないだろう」

「ガーランドさんについてですか？」

「そうだ。いったい何者なんだ」

「どうしても、とおっしゃるなら言いますがね。あなた様の弟さんですよ」

「ジョン、ありがとう。おやすみ」

「そのことを本当にご存知なかったのですか？」と、年配のボーイは質問をし、すべてのことを話してしまつた安心感から長居を決めこんでいた。

が、「ジョン、ありがとう。おやすみ」と、先ほどと

同様の答えが返ってくるだけであつた。

「はい、ありがとうございませす。雨が降りそうですね。

おやすみなさいませ」

雲一つなく晴れわたつた空には、星や月が輝いているだけであつた。雨が降りだしてきたが霧雨で弱々しいものであり、それはまるで蒸気の水しぶきのようであつた。誰一人として雨を気にする者はなく、子供たちは裸足で芝生を走り回つたり、砂場に飛び込んだりして遊び続けていた。まもなく雨もやんだ。南東の方向には、ダイヤモンドヘッド（ハワイ州オアフ島にある死火山）が一つのシミのように見え、その輪郭はくつきりとしており、星を背景に噴火口の形だけが、目に止まつた。ゆつくりとした間隔で、浜辺の波が泡を砂

浜から芝生へと運び、はるか彼方には月の光を浴びて泳いでいる人たちの姿が、黒い小さな粒のように見える。ワルツを歌っている人たちの声はいつの間にか聞こえなくなった。辺りが静まりかえっているなか、木陰のどこからか、突然女性の笑い声が聞こえた。それは男女が愛しあっている声であった。パーシヴァル・フォードはびつくり仰天し、ケネディ博士の言葉を思い出した。砂浜まで引きずっていった舷外浮材げんがい（外に張り出して取りつけられた安定用の浮材）の付いたカヌーの下で、カナカ人の男女がげだるそうにもたれあっている。その様子はまるで、ロトスを食べている人たち（ギリシヤ神話：ハスの実を食べて一切を忘れ、至福の境地に暮らしている人たち）のようであった。女性たちは白

いハロク（ハワイのシルクのドレス）に身をまとっており、舵取りの男たちの黒い頭が女性たちの肩にもたれかかっていた。はるか彼方には、低い砂洲によって海から隔てられた潟湖せきこがあり、その入り口あたりに広まっている砂浜では、男女が手をつないで歩いていった。二人は白みがかかったラーナイ（ベランダ）に近づくと、女性は腰にまいてあるベルトに手をやり、はずそうとしている。パーシヴァル・フォードの前を通り過ぎるそれらの男女のなかに、知り合いの船長や少佐の娘を見つけたので会釈をした。こんなことは幻影としか思えない。今度は暗い稲子豆イナゴマメの木陰で、男女の愛し合っている笑い声がまた聞こえてきた。自分が座っていた椅子を通り過ぎて寢室に戻ろうとすると、裸足の子供

が日本人の子守女にたしなめられているのを目にした。そして、歌っている者の声が優しい甘く優しいものに変わり、ハワイのラブソングが演奏された。高級船員や女性たちは抱きあいながらラーナイでダンスに興じていた。するとまた、稲子豆の木陰から女性の笑い声が聞こえてきた。

パーシヴァル・フォードは、そのようなことすべてが気に入らなかった。女性の愛のささやき声、舵取りの頭がハロクの上に載せられていること、男女が海岸を散策すること、高級船員と女性たちがダンスをすること、ラブソングを歌っている者の声、そして、弟がハウ・ツリーの木陰で一緒になって歌っていること、すべてにイライラしていたのだった。特に、女性の笑

い声には我慢がならなかった。そして、奇妙な考えがどんどん頭に浮かんできた。自分はアイザック・フォードの息子であるので、父親に起こったことが自分にも起こるかも知れない。そのように考えるだけで、顔が熱くなり赤らむのを感じ、言葉では表わせないほど恥ずかしいと思った。自分の家系に対して、ぞつとずる気持ちになったのだった。それはあたかも、父親がハンセン病患者で、自分の血液にもその恐ろしい病原菌が入り込んでいるかもしれないと、ある日突然に知らされたのと同様の気持ちであった。父親は、ハワイ国王を守る厳格な軍人であったと聞かされていたが、猫をかぶっていたんだ！ 父親とルンペンと、いったいどんな違いがあるというのか？ パーシヴァル・フ

オードが長年にわたって築きあげてきた「誇り高き家系」というものが一瞬のうちに崩れ去っていた。

数時間が経過しても、軍関係者は笑ったりダンスをしており、現地のオーケストラは演奏を続けていた。

フオードは、青天の霹靂（へきれき）のごとく降りかかってきた難問に苦悩していた。肘をテーブルの上に置き、頭は手で支えながら、静かに祈っていた。その姿はまるで、うんざりした見物人のようであった。ダンスの間を兼ねて、軍関係者や一般市民たちは、急いでやって来ては月並みな話をした。が、その者たちがラーナイ（ペランダ）のところにもどつてしまうと、心を悩ましている問題に再度取り組むことになった。

フオードは父親が理想郷まで至らなかったことにつ

いて論理的な答えを見つけようとし、その根拠とし

て、ずる賢い巧妙な論理を用いた。それは自己中心主義という考えを基にして、勝手に頭の中だけで創りあげたようなものであったが、精神を落ち着けるといっ点ではうまく機能した。父親はまわりの誰よりも立派な肉体を持っていたが、精神的にはまだまだ成長の途中にいたにすぎない、ということは否定できない事実である。それに対して、自分は肉体・精神ともに完成した存在なのだ、と考えることにした。その結果、自分分は父親の名誉も回復すると同時に、自分自身の身分を高めることにも成功したのだ。パーシヴァル・フオードのもとと少ない自己中心主義の割合が、飛躍的に大きなものになっていた。父親は、許しを受けるべ

き偉大な人物なんだ。そう考えるだけで、心地よい満足感を覚えた。父親は偉大な人物であったが、自分はその上をいつているんだ。自分は父親を許すことができないし、さらに、父親の思い出を汚れた場所から神聖な場所に回復することもできる。また、パーシヴァル・フォードは、父親が人生のある時期に横道にそれた結果を無視したことを称賛した。だから、自分も人生における汚点を無視してもよいのだ、と考えるようになった。

ダンスは終わりに近づいていた。オーケストラは「アロハ・オエ」（ハワイ王朝最後の女王が一八九八年に作詞したといわれる歌）の演奏を終え、帰る準備をしているところであった。フォードは、手をたたいて日本人のボ

ーイを呼んだ。

「あの男に、会いたいということを伝えてくれ」と、ジョー・ガーランドを指差しながら言った。「今すぐ来るように言ってくれ」

ジョー・ガーランドは数歩先までやって来て、そこにうやうやしく立ち止まった。手は持っているギターを落ち着かない様子でさわっていた。腰を下ろすようにも言われていなかった。

「あんたは私の弟なんだってね」と、フォードは訊ねた。

「ええ…、みんな知っていることですよ」と、驚いた様子でジョーは答えた。

「うん、そのようだね」と、ぶっきらぼうに言った。

「でも、今晚までそのことは知らなかったんだ」

腹違いの弟は、話の続きを落ち着かない様子で黙って待っていた。そうしているうちに、フォードは冷淡な調子で次のようなことを言い出した。

「あんたは私が最初に学校にやって来たとき、学生たちが私の頭を水中に押し込んだのを覚えているかい？」と尋ねた。私の肩をもったのはなぜなんだ？」

腹違いの弟は、恥ずかしそうに微笑んだ。

「私たちが兄弟であるということを知っていたからかい？」

「ええ、おっしゃるとおりでございます」

「でも、私はそのことは知らなかったんだよ」と、同様にぶっきらぼうな調子で言った。

「そんなことはあり得ないと思うのでございますが」と相手方は口をはさんだ。

また二人は沈黙した。ボーイたちはラーナイの照明を消し始めた。

「今やっと分かったということでございますね」と、腹違いの弟は手短かに言った。

パーシヴァル・フォードは、まゆをひそめた。そして、意味ありげに相手の顔を見た。

「ハワイ諸島からアメリカ本土に行つて、一生もどつてこないとなれば、どれぐらの費用がかかると思ふかね？」と、暗に強制退去を迫つた。

「二度とハワイにもどつてこれないのでございますか？」と、ジョーはたじろいだ。「ハワイは僕が知つて

いる唯一の土地なんです。他のところは、寒いですよ。ね。他の土地のことは何も知りません。ここには友だちもたくさんいますが、他の所では気軽に声をかけてくれる人は誰もおりませんしね」

「二度と帰ってくるなど言っているんだ」と、パーシヴァル・フォードは繰り返し強調した。『アラメダ』号は明日、サンフランシスコに向かって出発するよ」

ジョーは躊躇ちゅうちよした。

「でもなぜ、そのようなことをおっしゃるのでしょうか？」と尋ねた。「私たちが兄弟だと、もう知っていらつしやるのに」

「だから、そう言っているんだよ」と、返事が返ってきた。「あんたも言ってたように、みんなそのことを知

っているんだ。それが問題なんだ。悪いようにはしないから」

ぎこちなさと当惑の気持ちだが、ジョーからなくなつた。出生と身分について理解が深まり、その葛藤を乗り越えることができたからである。

「僕がこの地を立ち去ることを、お望みなんですか？」と尋ねた。

「そうだ。あんたにここから立ち去ってもらつて、二度と帰ってきてほしくないんだ」と、フォードは答えた。

次の瞬間、目の前がピカツと光り、目の前の弟が山のように大きくなり自分を見おろしているような感覚にとらわれた。また、自分自身がだんだんちつぽけな

人間になっていき、顕微鏡でしか見えないほど取るに足りないものに感じた。人間というものは本当の自分を見ることはまれで、ずっと自分を見つめ続けることは不可能である。けれども、瞬間的に光が発せられていたそのときだけ、フォードは自分自身と弟を真にフランスのとれた視点で見つめることができていたのだ。が、次の瞬間、光は消え去り、いつもの貧弱で強欲的な自分に支配されていた。

「さっき言ったように、これはあんたのためでもあるんだ。悪いようにはしないからさ。十分お金ははずむからな」

「いいですよ。行きますよ」と、ジョーは決断をした。そして、向きを変えて歩き始めた。

「ジョー」と、パーシヴァル・フォードは弟に声をかけた。「明日の午後、私の弁護士に会ってくれ。その場で五百ドル、また、故郷を離れている限り毎月二百ドル支払うよ」

「とても親切なお言葉、ありがとうございます」と、ジョー・ガーランドは優しい声で返事をした。「でも、それはあまりにも私の身に余ることです。それではともかく、お金はいただけません。明日、『アラメダ』号で出発します」

そのような言葉を残して立ち去ったが、別れの挨拶はなかった。

パーシヴァル・フォードは手をたたいた。

「ボーイ」と、日本人の従業員に向かって飲み物を注

文した。「レモネードを持ってきて」

レモネードを飲みながら、パーシヴアル・フォード

は自分自身に向かって、長い間満足そうに微笑ほほえんでいた。